

2026年曳山祭順路図

4日
午後6:00～午後10:00まで
善徳寺前交差点から城端庁舎前交差点が
通行止

5日は右図の通り
午前8:30～6日午前0:00まで
通行止



●曳山祭見どきガイド

4日(月) (宵祭)
6ヶ町の各山宿での飾り山は必見です。
18:00～ 御旅所(じょうはな座)にて獅子舞、お着儀、浦安の舞、城端賛歌、庵唄が奉納披露されます。
18:30～ 曳山会館にて、獅子舞・浦安の舞・城端賛歌・庵唄合同披露等が催されます。(雨天中止)

5日(火)
9:00～ 御旅所から神輿・傘鉾行列が出発し、氏子町内を巡行、16:00ごろには神明宮へ還御されます。
10:00～ 善徳寺前に6台の曳山が集合し、野下→今町→東上→西下→東下→西上へと所望宿で庵唄を唄い巡行します。
13:30～17:00 東上(宗林寺町)から出丸に向けて巡行します。大工町での曳山屋根の折上げや、西下町(横町)と出丸町でのUターンが見ものです。
18:45 提灯山となり広小路を出発。東下→東上→大工町→新町
14:00頃と20:00頃 曳山会館(特設会場)にて各町の庵唄が披露されます。庵屋台・曳山紹介。
21:00頃 城端市民センター前での提灯山行列の引き返しは圧巻です。

飾り山宿

① 東上町	東上町内会 (棚田均精宅)
② 大工町	山下 幸応 (畑 時夫宅)
③ 西上町	黒田 泰人 (和 楽 庵)
④ 東下町	東下町内会 (東 町 庵)
⑤ 出丸町	出丸町町内会 (出丸町公民館)
⑥ 西下町	藤田 賢治 (西下町公民館)



画 小原好博



優雅な庵屋台と華麗な曳山行列、桐の花咲く坂の町に紫の香りが流れる。

一番山
東上町
鶴舞山
つる まい やま
安永年間、小原治五右衛門の作
(1772~1781年) 輻車
千鳥・唐破風二重屋根、平天井



寿老

〔安永2年(1773年)、荒木和助の作〕



二番山
大工町
千枚分銅山
せん まい ぶん どう やま
明治31年の大火で類焼、同39年
浅野壽平・辰次郎の作。 輻車
四方唐破風の屋根、平天井



関羽・周倉

〔寛政8年(1796年)、荒木和助の作〕



三番山
西上町
竹田山
たけ だ やま
安永年間、小原治五右衛門の作
(1772~1781年) 板車
四方一文字の屋根、平天井



恵比須

〔寛政7年(1795年)、荒木和助の作〕



四番山
東下町
東耀山
とう しょう やま
享保年間の作を改修・増補
(1716~1736年) 輻車
前後唐破風の屋根、格天井



大黒天

〔安永3年(1774年)、荒木和助の作〕



五番山
出丸町
唐子山
から こ やま
享保年間の作を改修・増補
(1716~1736年) 板車
前後唐破風の屋根、平天井



布袋

〔宝暦12年(1762年)、荒木和助の作〕
〔弘化3年(1846年)、小原治五右衛門改作〕



六番山
西下町
諫鼓山
かん こ やま
享保年間の作を改修・増補
(1716~1736年) 板車
三方唐破風の屋根、平天井



堯王

〔享保元年(1716年)、木屋仙人の作〕



「曳山」

「御神像」

「庵屋台」



「庵唄」 解説：「唄の流れる里 桂書房引用

夏は堂のともしびに短かき夜半をくよくよと
泣きあかしたるほととぎす あおげば顔にばらばらと
アレ村雨が袖うらぬれて
よいよい、よいよい、よいよい、
〔解説〕上方端唄系文久二年(一八六二)の『群の浪(初巻)』に
出てくる。その後江戸端唄として使用されたところ
が城端端唄として大正十四年に布袋同志会で初めて演奏されてより、
現在に至るまで各町内で使用され多数の唄も出来た。
歌意は恋に泣き明かした心を、堂やほととぎすに託して述べて
いるが、やや常套手段の詞章である。しかし飾付が庵唄として適合
しているゆえに流行している。

草の葉に 冠友会
草の葉に 宿りし月も小夜風に
憎やこぼれて ばらばらと
露か雫か 雫か露か
濡れて色増す 野辺の色
〔解説〕慶応元年(一八六五)江戸市村座の狂言「処女評判番悪統」の
中へ使った清元の「夕立」の一節の端唄である。作詞者は河村阿弥
で作曲は清元順三(二世)と伝えられている。須走りのお熊と、真野屋
徳兵衛との濡れ場がこの端唄はめ込まれて、しつとりとした飾付
で如何にも江戸端唄らしい味がある。歌詞もさすがに阿弥の作だ
けに簡潔の中へ充分艶をもたせている。

薄墨 惠友会
薄墨に書く至章の 思いいで
雁啼き渡る宵闇に 月影ならでまさんに
焦がれて悪知な たたみ算
思いまわしてままならぬ 早く苦界を候かしく
〔解説〕幕末の安政五年(一八五八)に出来たうた沢の新曲で、後に
江戸端唄の代表曲となる。歌詞は津守固基の和歌の「うす墨に書く玉
章に見ゆるかな かすみの奥へ帰る雁金を台にして、遊里の女性
の悲しみを描写している。「暈算」は古い一種で、待人が来るか来な
いかを、算を投じた壺の目を数えて占う。庵唄は特にうた沢の前弾き
をそのまま使用している点注目される。

空ほの 宝槻会
空ほの 時き 東雲に
木の向がくれの ほととぎす
鶯のはつれと かきあぐる
柳の雫か 雫が露か
濡れてうれしき 今朝の雨
〔解説〕俗に照阿弥のザンギリ狂言と称された明治を反映した
筋書きで、照阿弥が白浪物一世二代の書き納めとして、場面
は東京神楽坂の望月(金貨)の住居で、旅芸者弁天お照との濡れ
場の詞章である。

五月雨 布袋同志会
五月雨に 池のまこもに 水まして
いづれが菖蒲 杜若 さだかにそれと 吉原へ
程速からぬ 水神の はなれ座敷の夕げえに
らよと見かわす 富士筑波
〔解説〕江戸端唄系 明治二十四年(一八八七)に当時名人と
称された清元お葉が作曲したもので、作詞は川田小一郎である。
日本銀行総裁であった川田が愛人を連れて、向島水神の料亭「八百
松」に遊んだ時、はからずも一人の愛人と縁を結ぶことになり、とんだ
精当となった。「富士筑波」はその意味で、「いづれが菖蒲をうばた」も
勿論、女性同士のことである。お葉はの情景を、見事に小唄としたので
最後に「オクリ」が入っている。

重ね扇 諫鼓共和会
重ね扇は よい辻占よ
ふたりしつぱり抱き抱 菊の花なら いつまでも
いけて 眺めているころ 色も香もある 梅の花
〔解説〕江戸端唄系 文化十四年(一八一七)江戸中村座で
上演した「道善累扇子」に、三代目尾上菊五郎が七役を演じ好
評を受けた時に出来た小唄である。元唄は「重ね扇はよい辻占
よ、二人しつぱり抱き抱、こちや命でも何のそ」であり、重
ね扇、抱き抱は尾上家の紋を意味している。
現行の曲は明治中期に永井素岳が改調して作ったもので、
「活けて眺めて、梅の花」の一節は、五代目菊五郎の愛人辻井
梅の名を隠している。